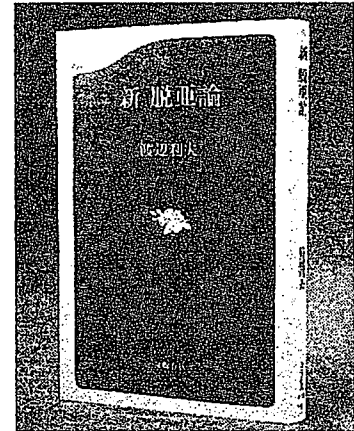


『新 脱亜論』 渡辺利夫著

(文春新書・935円)



誰を友とすれば幸福か？

評・屋山太郎

(政治評論家)

著書の渡辺氏は「福沢諭吉が『脱亜論』(明治18年)を執筆した時の気分が私にもよく理解できるように思える」と書く。

福沢は「日本の生存のため」の唯一の方途は隣国と「謝絶」し、みずからのアイデンティティを東洋にではなく西洋に求め、そうして初めて日本の自立が可能になると主張した」という。しかし、歴史は福沢の思惑と反対に動き、東アジアに強くコミットし、折角築いた明治の栄光を大正と昭和の20年で崩壊させた。

日清・日露戦争に至る歴史を繙きつつ韓国併合に至る道は、いわば一本道だったのではないかと著者は解釈する。軍事力において劣勢の日本がロシアに勝利し得たのは、国際環境についての判断力にすぐれ、イギリスと組んで背後を固めたからだった。その日本は第二次大戦で無残な敗北を喫し、国家的危機に陥った。

著者がこの書を書いた動機は福沢諭吉、陸奥宗光、小村寿太郎のリアリズムを振り返りつつ、日本は「誰を友としていた時に幸福であり、誰と関わった時に不幸であったか」を知りたかったからだという。

結論として日英同盟、日米同盟という海洋国家同盟こそが日本の選択であるべきだ。「東アジア共同体」に日本が加わって「大陸勢力」中国と連携し、日米の距離を遠くすることは、日本の近現代史の失敗を繰り返すことになるかと断ずる。

「東アジア共同体」というのは全くの錯覚であって、福沢が「亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」と指摘した悪友とは清国と朝鮮である。福沢の言葉は激越だが実によく神髓を衝いて今も変わらない。その中国について著者は「地域覇権主義」を見据えよと説き、「東アジア共同体」という「罽」のような怪物に日本が飲み込まれることは避けなければならぬと警鐘を鳴らしている。

最後に中・韓の友人に「日本人が冷遇と侮蔑にいつまでも甘んじ続けるという前提は危ういのではないか」と凄んでいる。痛快だ。

◇ わたなべ・としお 拓殖大学長、経済学博士。昭和14年、甲府市生まれ。